

もみの木

【side: 神林晃成】

「もうこんな季節なんだね」

いつもの百貨店で、不意に芦花^{ろか}が足を止めた。

どこか寂しそうに言う芦花の視線の先には吹き抜けになった広場があり、金色と真紅の飾りを纏^{まと}った大きなクリスマスツリーが展示されている。

「もうクリスマスかよ」

十一月上旬だと言うのに、ずいぶんと気が早い。世間にはすでに年の瀬の影が色濃く忍び寄っているようだ。

芦花と訳ありの同居を始めたのが今年の三月。

凍る雨に新宿御苑の桜が蕾^{つぼみ}を固く閉ざしていた頃で、最初は芦花の復讐に加担しつつ犯罪から手を引かせるのが目的だった。それが紆余曲折の末、芦花は俺の家に居座

り、今では俺の新年会用の服を求めて百貨店に同行する——という名目で平日もデートする——そんな関係になった。

八か月前は他人で、かつてはラブホに拉致して全裸で監禁した相手が今は俺を恋人と呼んでいるのだから、人の縁は不思議としか言いようがない。もし神なんてのが実在するとしたら相当気まぐれで思考がぶっ飛んでいる。

「早えなあ、もう今年が終わんのかよ。ジジイになると刺激が減って一年があつという間に感じるつつうけど、三十代でこれだと老後が怖えな」

ぼやく俺の隣で芦花が優雅に目を細める。

激動の一年で、とてつもなく充実して刺激だらけだったと言うのに、なぜか体感は一か月くらいだ。どこに溶けて消えたのかと思うほど、時間の輪郭は曖昧に感じられる。

「おばあ様は、年長者が一年を短く感じるのは自分の経験値が増えた証拠だってよくおっしゃってたけどね」

芦花はいたずらっ子の笑みを浮かべて俺を見つめた。

「人間的成長の証なんだから誇ればいいよ」

「物は言いようだな」

俺は口元を歪めて息だけで笑う。

肩から大きな紙袋を下げた姿で、芦花と一緒にクリスマスツリーを見上げた。芦花がこっそりと俺のコートの袖を指先でつまむ。

最近の芦花は、亡き祖母の話をこうして自然にできるようになったし、纏う空気も柔らかくなった気がする。元から優雅で社交的な男ではあったが、ここから先は踏み込ませないという確固とした一線が以前はあって、心の奥底は決して見せなかった。

それが素直に感情を表すようになり、今はもう可愛さがインフレ状態だ。

「そーいやクリスマスは仕事か？」

「あ、伝え忘れてた。今年は二日間とも店を閉めることに決めたんだ」

「まじか。稼ぎ時じゃねえのかよ」

「それはそうなんだけど、バイトさんも社員もそれぞれ家族や恋人がいるし、私生活も大切にしたいねって話にスタッフ会議でなつて。この先も気持ちよく働いてもらいたいから休みにした」

「思い切った判断だな」

「その分、元旦は短縮営業で店を開けるけどね。初詣のお客さんで稼ぎたいし」

芦花の職場は、新宿三丁目にある『三人猫』さんにんねこというカフェだ。店の名前は意味不明だが歴史は古く、店の裏側には豆の焙煎機もあり本格的なコーヒーを楽しめる。

芦花はこれまでバリスタとしてこの店で働いて来たが、夏からは店長補佐として運営側の仕事も任されるようになった。経験と知識を積んで行く行くはあの店の経営者になり、店長として人生を終えたいのだと言う。

「バイトのやつら、クリスマスが休みになって喜んだろ」

「どうかなあ。でも、不本意な出勤だけは誰にもさせたくないんだ。うちの店は従業員キヤストに会いたくて来られるお客様もいらっしゃるから、みんなにはすこしでも幸せな顔でお仕事して欲しい。晃成のところは？」

「うちは毎年、時短営業で三人だけ出勤にして、勤務したら二万円のインセンティブをつけてる。クリスマスにわざわざ不動産屋に足運びたがる客もいねえしな」

「なるほど」

おもしろい手を考えるね、と感心したように言う。と芦花は深く息を吐いた。

「――今年は、心穏やかに過ごせると良いなあ」

精巧につくられた模造品イミテーションのもみの木を見上げてつぶやく。

その声はわずかに悲しげで、ここではないどこか遠くを眺めているように思えた。